

「融」と河原院、そして涉成園

東本願寺総務部次長 近松 誉

能「融」は、平安時代の貴族・源融（822～895）が造営した六条河原院を舞台とする曲である。

六条河原院は、北限を六条坊門小路（現・五条通）、南限を六条大路（現・六条通※1）とし、東は東京極大路（現・寺町通）、西は萬里小路（現・柳馬場通）を境とした、方四町の広大な地域を有した邸宅で、陸奥国塩竈（現・宮城県塩竈市）の風景を模した庭園が設えられたという。この大邸宅は融の死後、数度の火災によって荒廃したといい、後世に至って「融の幽霊が出る」との伝承も生まれた※2。能の「融」は、この伝説に着想したものであろう。

「融」のストーリーについて、本稿では詳細に述べる必要もないのであるが、前半では塩竈の風景に想を得て六条河原院が営まれた謂れが語られ、後段では幽霊となって現れた融が昔の栄華を懐かしんで舞うというものである。併せて、往時は六条河原院から見渡せたであろう京都の山々に話が移るといふ「名所語り」の要素も織り込まれた内容となっている。

私が奉職している東本願寺（真宗大谷派）の別邸・涉成園は、この六条河原院の跡地という伝承のある庭園で、京都市民には「枳殻邸」の名でも親しまれている。涉成園は約1万坪の敷地を持つ広大な庭園で、東本願寺第13代・宣如上人（1602～1658）が徳川家光から寄進された土地に営んだ隠居所がそ

の濫觴であり、1653（承応2）年頃から造営されたと考えられている。

この「河原院故地」説は、園の造営後間もない頃からまことしやかに伝えられてきた。江戸時代の俳人・北村季吟（1625～1705）は、その著書『菟藝泥赴』に

高倉六条に宣如上人隠居をいとなみ給へるにむかしの融公の
鹽竈をほり出たり ここやそのかみ河原院の跡なりけらし

と記しており、この説が語られた最初だと言われている※3。ここでいう「融公の鹽竈」とは、現在も園内の茶室・縮遠亭の脇に据えられている「塩釜の手水鉢」のことであろう。また、ほぼ同時期に九層の石塔が掘り出され「融の供養塔である」とされたこともあり、涉成園創建の頃から「河原院故地」説が広がっていったと考えられる。

ところが、鎌倉時代末期に成立した故実事典『拾芥抄』に記される河原院の位置は、現在の涉成園から若干東北に外れており、「塩釜の手水鉢」も石造宝塔の塔身であることが明らかとなっている。供養塔とされる九層の石塔にもその根拠はなく、各種の研究が進んだ近現代に至って「涉成園＝河原院故地」説は、ほぼ否定された観があるというのが実状である。

しかし、現在も涉成園には、『源氏物語』の世界を求めて訪れる方が多い。それは六条河原院と同じく東山の峰々を借景とし、先述した「塩釜の手水鉢」をはじめ源融の伝承を十二分に意識した景物が処々に配置された涉成園が、源融と六条河原院のすがたを偲ぶに足る何かを有しているからであろう。

「融」では、荒廃した六条河原院で一夜の宿を求める僧侶が登場し、汐汲みの老人や融の霊が現れて、院と融の栄華を語り、華麗に舞う。そこでは儂い時の流れとともに、生と死のコントラストが幽玄のうちに語られる。

涉成園もまた、浄土を欣求する真宗本山の別邸として、独自の様相を持つ庭園である。隠居した東本願寺宗主が日々の勤行を行った持仏堂「園林堂」は園の中央に位置し、庭園に向けて山門である「傍花園」を開いている。単なる近世的な池泉回遊式庭園（いわゆる「大名庭園」）ではない。そぞろ歩く園内に現れる持仏堂、これこそが仏のみ教えを生活の規範として日々を送る真宗門徒のあり方を示しているのである。

生のみが我等にあらず、死もまた我等なり。
我等は生死を並有するものなり。

清沢満之『絶対他力の大道』

嵯峨天皇の皇子として生を享け、「河原左大臣」として栄華を極めた源融。しかしその栄華の痕跡は時を経て、失われようとしている。能「融」は、そうした世の無常、悠久の時の流れをモチーフとしているかのようだ。なればこそ、その舞台として六条河原院が選ばれたのだらう。そして、その河原院の故地としての伝承が、生死のこころを説く真宗寺院の別邸に残され

ているのも、何かの縁であろうか。

「融」が語られる季節は秋、浄土教における「彼岸」の季節でもある。寂靜の世界で舞われる「融」の世界に浸りながら、ふと自らの来し方行く末に想いを馳せる。それは、日本人の心に根づいた浄土思想―日本の原風景に触れるという心的な行為でもある。何かに急かされ、殺伐とした今を生きる私たちに、「融」の世界観は大切な何かを語りかけているかのようである。

1. 河原院の南限には諸説あり、七条坊門小路（現 正面通）とするものもある。

2. 公昔物語集『江談抄』黎明抄などに、宇多上皇と融の霊が遭遇する説話が収載されている。

3. 『造園の歴史と文化』（京都大学造園学研究室編）1987年所収「涉成園の歴史」より



涉成園・印月池からのぞむ侵雪橋